

## JICA & APARI フィリピンプロジェクト 第2回本邦研修報告 2010/8/17～28

### スケジュール

	日付	午前	午後	夜
1	8/17(火)		13:30成田空港到着	歓迎会
2	8/18(水)	ダルク25周年フォーラム		懇親会
3	8/19(木)	JICA地球ひろば訪問	ビジネスミーティング	
4	8/20(金)	NAコンベンション(横浜)		近藤誕生会
5	8/21(土)	NAコンベンション(横浜)		
6	8/22(日)	NAコンベンション(横浜)		午後:東京観光
7	8/23(月)	フィリピン大使館訪問		東京 藤岡へ
8	8/24(火)	三浦、山本による研修		琉球太鼓鑑賞 ワークショップ・HIV等感染症
9	8/25(水)	ワークショップ・ヨガ	ワークショップ・動機づけ面接法	NA
10	8/26(木)	藤岡 京都へ		京都ダルク見学
11	8/27(金)	龍谷大学にて講演会		奈良ダルクにて講演会
12	8/28(土)	午前:京都観光	14:20伊丹空港発 15:35成田着	18:40成田出発



Birthday Party In  
Yokohama  
近藤恒夫69歳



ダルク25周年懇親会にて



JICA地球ひろば 表敬訪問



フィリピン大使館 表敬訪問

#### < 東京 >

昨年に引き続き、フィリピンから新しいコアメンバー2名(キンバート氏、キャロル氏)が本邦研修に参加するため12日間滞在しました。

今年はダルク25周年でもあり、フィリピンのメンバーたちにも出席してもらいたいという近藤の思いもあり、ダルク25周年フォーラムと本邦研修の日程を合わせました。また、NAの大イベントである横浜で開催されたNAコンベンションとも重なったため、盛りだくさんの内容でした。

また、JICAからの提案でJICA地球ひろばやフィリピン大使館の表敬訪問が実現しました。

大使館ではコンフィアード総領事とお会いし、この事業の「意義」を説明し、さらにマニラ市が抱える薬物問題について意見交換が行われました。FWCとアパリの活動に興味を示され、事業について様々な質問をされました。「薬物問題は家族が抱える問題なのです。」とキンバート氏が述べると、「コミュニティや社会全体に関する問題でもありますね。」とコンフィアード総領事から言葉をかけられました。



東京タワー  
階段で登る

#### < 横浜 >

コンベンション会場の雰囲気や演出などとても素敵でフィリピンから来た2人がとても感銘を受け、自分たちの国でもこんな風にできたらいいなあ、と言っていました。

2日目の夜のクリーンカウントダウンにも参加し、会場にいた大勢の仲間たちのカウントダウンに喜び、盛り上がっていました。



NAコンベンション会場にて  
(横浜赤レンガ倉庫)  
左がキャロル氏、右がキンバート氏



NAコンベンション会場にて



秋葉原にて



< 藤岡 >



ヨガのワークショップ

昨年好評だった神田先生のヨガのワークショップを開きました。ヨガマットにブロックと様々な道具を使い、昨年よりも少しレベルアップした内容でした。

ヨガは呼吸を通して心と身体を整えるというものなので、依存症からの回復の一助になるものと考えます。アメリカのセレブの施設でもヨガを行ったり、日本でも横浜、スルガ、栃木ダルク等でも取り入れられています。

原井宏明先生を招いて動機づけ面接法（モチベーション・インタビューング）のワークショップを開催し、これには刑務所職員3名、横浜ダルク、群馬ダルクから参加希望があったため、一緒に受講することになりました。

5つの大原則「共感、矛盾を広げる、言い争いを避ける、抵抗を手玉にする、自己効力感を援助する」から援助技法を学ぶとともに、どんな答えづらい質問に対しても即座に答えるという技を披露していただき、これはダルクの入寮者からの困った質問に対応するときに役立ちそうです。



動機づけ面接法のワークショップ



散歩の途中で



琉球太鼓の演舞の後に記念写真

昼食後にプログラムで毎日練習している琉球太鼓をスタッフ、入寮者計7名で披露しました。

キャロル氏は今年の2月にフィリピンで開かれたNAコンベンションでこの太鼓の演舞を見たことがあり携帯に写真や動画も撮ってありました。同じものが見られたと大はしゃぎでした。

< 京都・奈良 >

8月26日に本邦研修中のキンバート氏とキャロル氏を京都に案内し、京都ダルクを見学しました。翌27日の午前中、龍谷大学矯正保護・総合センターで「フィリピン薬物依存治療事情」の講演会を開いて、それぞれの体験談を話しました。午後には、奈良ダルクの「フィリピンのハイリスク群介入を学ぶ」と題する講演会でも、フィリピンの薬物依存者の社会復帰が貧困層では難しいという状況等について話をしました。



龍谷大学矯正保護・総合センターにて



左が京都ダルク  
右が奈良ダルク



京都 三十三間堂にて



奈良ダルク研修センターにて

フィリピンの2002年包括的危険薬物規制法15条は、初犯の薬物自己使用事犯者に対する6カ月以上1年以下の政府のリハビリ施設（保健省管轄）への入所を義務付けていますが、実際には、予算不足のため、事実上末端ユーザーが野放しになってしまっていると聞いています。そのためフィリピン保健省はアパリが提供するほとんどコストのかからないコミュニティー・ベースの通所プログラム（ARMミーティング）を歓迎してくれています。

京都ダルク、奈良ダルク、龍谷大学矯正・保護総合センターには今回の本邦研修では多大なご支援を戴きました。厚く御礼申し上げます。



## JICA & APARI フィリピンプロジェクト「フィリピン薬物依存治療事情」 龍谷大学矯正・保護総合センターでの講演から抜粋

### 沖縄ダルク・三浦陽二

最初に近藤から沖縄ダルクは、目標をハイクラスのダルク、スタッフ養成のダルク、アジアの中心となるダルクにしろと言われた。マスコミからの協力などもあり発展したが、しかし、アジアの中心には至っていない。ダルクのプログラムはNAのプログラムと共通している。仲間の手助けをする中で自分が変わっていく。止めなさいと言うのではなく、仲間の手助けをするなかで使わないでいられるようになる。変っていく姿で自分のプログラムが間違っていないと確信していった。日本のNAができたのは、ハワイの仲間の力が大きかった。お金などもハワイのメンバーが献金して日本のグループが成長していった。日本がしてもらったように、他の国にも援助していくんだと思った。しかし、実現し始めたのはここに2~3年。各地域の差を考えながら支援していかないといけない。海外のプログラムをそのまま持ち込むのはいけない。ヘーゼルデンを見学しに行った時、600人の職員がいてそのうち200人が健常者で400人が依存症者であった。世界的な施設として思い浮かぶのはそこで、そのプログラムで気付くことが多かったが、日本にそのまま持ち込んでも合わないと思った。例えば、ヘーゼルデンではシンナーの人は今まで来た事が無いと言われた。ブルーカラーを受け入れていなかった。ホワイトカラーの人だけだった。

1998年、ワールドカンファレンスの会議に出たが、リッチーがフィリピン代表で来ていた。その時に近藤が紙飛行機を飛ばしだして、リッチーがそれを覚えていた。この人はおかしいと思ったという。そのころはあまり関わる機会はなかったが、2回目に12ステップの施設を見に行ったらリッチーの施設だった。その後関わりが出来た。今でもそうだがフィリピンのプログラムはお金のある人だけ。桁外れの金持ちが参加する。残念ながらそういう人の中で、来日したときにNAのミーティングに来てくれる人がほとんどいなかった。フィリピンでは、ミーティングはビバリーヒルズのような高級街など警備の厳しいところで行われていて、貧困街までは至っていない状態だった。当時、シャブがはやり始めていた。いわゆるジャパユキさんたちがシャブを覚えて帰ってきて、他にはハイコデイン（日本では鎮咳薬）などが薬局にあたりした。運命的にリッチーと知り合って、フィリピンでの支援が自分のやるべきことではないかと思った。一方で沖縄で15年活動していて飽きてきたし、東京に帰りたいたいと思い始めていて、次第にフィリピンと一緒にいく仲間を誰にするか考え始めていた。しかし、薬物の広がる理由は日本と違う。日本では自己評価の低さだったり、仲間同士の繋がりだったりするが、フィリピンでは貧困が大きな原因の一つにあげられている。それを思い知らされた。彼らにとってはパンよりもシンナーが安いから、空腹を抑えるために使っている。それを目のあたりにして、考えなくてはいけないと思った。貧困をなくすことが薬を止めるために必要なら、それが僕らにできるのか。どこまでできるのか、仕事もプログラムとして必要ではないのか。仕事をあっせんしたり、仕事を作ったり、食事を配ったり、プログラムに来てもらう方法も考えなくてはいけない。どうしても貧困などは僕らの考えだけでは済まないところ。日本のいいところをフィリピンに合うところを探して欲しいと思っている。フィリピンの彼らはよく勉強していて、問題意識をしっかりと持っている。僕らは教える立場だけではないと思った。例えば、日本ではNAのベーシックテキストの翻訳にかなりの時間がかかったが、フィリピンでは早々と翻訳して知っていた。しかし、情報が早くても、貧困層には伝わらないという問題がある。現状コアメンバーも富裕層が中心である。プログラムが進んで行ったら、率先して貧困層にメッセージを伝えて欲しいと思っている。僕が出来ることは発想面。例えば、フィリピンにダルクを作るならどうするかを考えてみる。貧困層に病院自体が無い。もしダルクを作るにしても足りないものは多いし、彼らに必要なのかもわからない。

### キンバート氏体験談（フィリピンプロジェクト コアメンバー）

私は裕福な家庭に生まれ、私立の男子校に通っていた。私はマニラの高校で寮に入った。その当時、アルコールやパーティー遊びを覚えた。1984年に友人からシャブを誘われて使うようになった。これを使っていると一晩中楽しく遊べるといわれて試してみた。すぐに世の中のせいにして、最初はパーティー目的だったが嫌なことがあればすぐに使っていた。そのうち、私の家族、兄弟とけんかした時に使ったり、多くの時間を薬につき込み、良い時も悪い時も使うようになった。大学も終了できない状況になり、パーティ生活をやめ、ドラッグから離れようと、マニラを出た。その後4年間はクリーンだった。家族のもとに戻り、郊外で父の手伝いをしていた。結婚も夢見ていたが父との関係がうまくいなくなってしまう、またドラッグを使いたいと思うようになった。2003年頃お金も使い果たし、農園も売り払い、全て薬に費やした。家族は心配し始め、回復のためにリハビリ施設を探すようになった。家族は最初に精神科医に私を連れていき、その医師はリハビリのプログラムを提案した。家族と精神科医と一緒に私の飲み物に睡眠薬を入れて眠らせ、起きてみたら精神病院に入れられていた。自分には問題はないと思っていたし、プログラムは不要だ、どうしてこんなところに入れるんだと家族に訴えた。入院1ヶ月後に修道女が運営しているリハビリ施設に行った。そのプログラムオフィサーはヘーゼルデンで訓練を受けた人だった。45日間で12ステップ中のいくつかのステップを行い、それ以外ではグループセラピー、精神病院に戻って状態をチェックし服薬を続けるなどした。私はNAとAAを紹介された。夜はそちらに通い、オールドタイマーと出会い、スポンサーを見つけてはどうかと提案された。選んだスポンサーはリラプスしてしまったが、私はミーティングに通いつづけることにした。7年間通い続け、自分の回復にとっては周りを助けることが重要だと知った。ミーティング開始前の準備をしたり、そうしたサービスを何年か続け、ホームグループの一員になる事を誘われた。NAのオーガナイズに誘われたりいろいろな手伝いをする中で、FWCとアパリの事業に関わることになった。ここに来る前は実際何をやるかわからなかったが、次第に何をすべきか何をやるのか分かってきた。

正直まだ私もステップを実行している段階です。失ったものを取り戻すことはできないが、回復によって新しい人生を築き上げるようになった。何よりも今回の機会は周囲の為に、自分の回復の為に感謝したい。ありがとうございました。